Vol. 25

TOSHIN Hearing NEWS

2023 年 6 月発行

Bluetooth を活用した次世代の聴覚補助技術と補聴器市場への影響

Bluetooth SIG（38,000 社以上の企業が参加する Bluetooth®テクノロジーに関するグローバルコミュニティ）は、Bluetooth の新しいオーディオ規格「LE Audio」と Bluetooth の新機能「Auracast™ブロードキャストオーディオ」が補聴器市場にもたらす影響などについて発表しました。LE Audio とは、Bluetooth LE 無線での動作に対応する次世代の音声規格です。これまでより少ない消費電力で高音質の音楽再生が可能になるだけでなく、今までは一対一の通信のみでしたが、ネットワークに参加する多数のイヤホンに同時に信号やデータを送信することができます。また、補聴器に内蔵されている Bluetooth との接続機能を備えています。

Auracast™ブロードキャストオーディオが、公共施設をはじめさまざまな施設で導入され音声情報を提供することになれば、聴覚補助を必要とする人が自身の Bluetooth 対応補聴器を用いて音声情報を受信できるようになります。現在、施設などで PA の音声を補聴器で直接聴取するには、別途専用機器が必要な上に、施設側への申し入れによってペアリングなどの行為が必要となります。LE Audio は、1 台の送信機から複数の Bluetooth イヤホンへ音声を送るブロードキャスト機能に対応しており、デバイスとイヤホンのペアリングが必要なく、通信可能な範囲に入れば通信できるので、1 台のスマートフォンで再生する音楽を友達と一緒に聴くような使い方のほか、映画館の観客へ一斉に音声配信するといった用途も考えられます。マルチストリーミングと組み合わせれば、映画館や空港なら音声の言語をチャンネルごとに変えて台詞や案内を流し、適切なチャンネルを選んでもらうという応用もあります。Bluetooth の新規格は、従来に比べて多様な補聴器への組み込みが可能になるので、LE Audio 対応機器が増えることで、補聴器と一般的なオーディオ機器との境界線が薄れ、補聴器の装着や接続に対する心理的抵抗の軽減が期待されます。

さまざまな環境で音声が聞き取れることは、すべての人に利益をもたらすと同時に、難聴者とのコミュニケーションアクセスを改善することができます。Auracast™ブロードキャストオーディオのような技術の出現は、補聴器や人工内耳を装着している人々に、日常生活における聴覚アクセスのための重要な新しい選択肢を与える可能性を秘めており、誘導ループなどの現在の補聴システムの質の低さ、高コスト、プライバシーの欠如などの多くの課題を解決できます。Auracast™ブロードキャストオーディオは、より高いオーディオ品質とプライバシーを提供し、音響的利便性を改善し、簡単かつ低コストで難聴者の QOL の改善ができる高度で新しい支援リスニングシステムとなります。また、駅、空港、その他の公共スペースではバックグラウンドノイズが多いことで難聴者の聞きとりを阻害しており、これらの音響的に困難な環境において、Auracast™ブロードキャストオーディオなどのソリューションは、難聴者のコミュニケーション能力を大幅に向上させます。したがって、補聴器ユーザーは音響的に困難な環境下でより簡単かつ安全に自分自身で行動できるようになり、様々なコミュニティーに参加できるようになるということは全体的な生活の質の向上に寄与します。

目次

1 Bluetooth を活用した次世代の聴覚補助技術と補聴器市場への影響
2 ホームページリニューアルのお知らせ
3 NHK ニュース（サイカルジャーナル）が難聴者の補聴器購入を阻む要因について報道
4 2023 年 1-3 月期の国内補聴器出荷台数が前年比 113.3%に

当社ホームページ リニューアルのお知らせ

当社は、きこえと補聴器に関する総合サイトとして自社ホームページを運用してまいりましたが、このたび、より時代にマッチした内容に変更すべく、リニューアルいたしました。
加えて、初めてご来店いただくお客様への予約フォームを設けるなど、利便性の改善も図りました。今後も難聴でお困りの方は元より、一般の方々へのきこえと補聴器に関する正しい情報の発信を心掛けて内容を拡充してまいります。

be heard Toshin

NHK ニュース（サイカルジャーナル）が難聴者の補聴器購入を阻む要因について報道

聞こえチェッカーで測定する様子

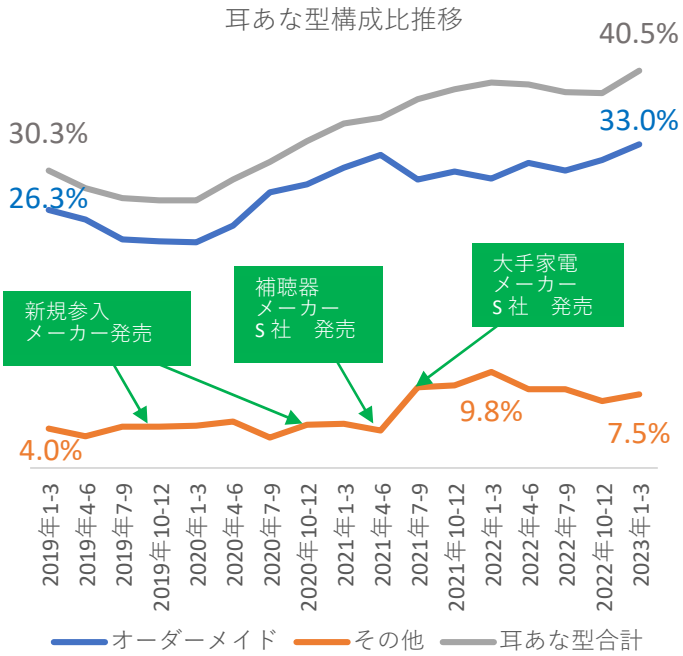
2023 年 1 月に（一社）日本補聴器工業会が発表した「JAPAN TRAK 2022」によって、我が国では自分自身で難聴の自覚がある人の割合が全年齢で 10.0%、とりわけ 75 歳以上では 34.4%にも及ぶにもかかわらず、これらの難聴者のうち自身の難聴について耳鼻咽喉科医やかかりつけ医に相談した割合はわずか 38%であることが分かりました。欧米諸国に比べて日本では難聴者が補聴器の購入に至るまでのハードルが非常に高いことは以前から指摘されていましたが、NHK ニュース（サイカルジャーナル）が 83 歳の男性難聴者の事例を紹介しつつ、この問題を報じました。男性は家族から難聴を指摘され、意識するようになったものの、難聴をそのまま放置していた理由として、自分自身では不便をあまり感じず、補聴器装用によって高齢者として見られることが嫌だったと述べています。最終的にはかかりつけ医から紹介された専門医による補聴器外来を通して難聴を自覚し、補聴器購入に至ったことが紹介されていますが、難聴者が補聴器購入に辿り着くまで一筋縄ではいかないことが窺い知れる内容でした。ニュースの中で東海大学の和佐野浩一郎准教授は難聴者が専門外来を受診するには心理的なステップが存在し、病院の受診を思いつかない可能性や聞こえ難さを自覚しても早期に受診する難聴者は少なく、難聴が進行してからや本人に難聴の自覚がなく、家族に連れられて受診する事例が多いことを指摘しています。

一方で難聴者の早期受診を促す方法も提言されており、そのひとつとして和佐野准教授の研究データを基にリオン株式会社が開発した「聞こえチェッカー」の活用が紹介されました。「聞こえチェッカー」は片耳 2 分程度の簡単な操作で「聞こえの年齢」というかたちで自分の聴力をチェックすることができ、どれくらいの年代に該当するか、可視化することによって耳鼻咽喉科の早期受診を促すことが期待されています。補聴器普及率や補聴器使用満足度が耳鼻咽喉科の受診率や購入ルートの違い（認定補聴器専門店・メガネ店・通販等）と密接な関連があることは各種データから明白であり、難聴者に耳鼻咽喉科の早期受診を促し、補聴器の適正供給ルートに誘導することは喫緊の課題と言えます。

聞こえチェッカーによる測定結果

2023 年 1-3 月期の国内補聴器出荷台数が前年比 113.3%に

日本補聴器工業会の発表によれば、2023 年 1 -3 月期の補聴器出荷台数が前年比 113.3%と大幅増となり、1-3 月期において 2019 年実績を上回りました（2019 年比 109.1%）。また、昨年同期に大幅増（前年比 220.8%）となっていたオーダーメイド補聴器以外の耳あな型（OTC 類）は、前年比 86.4%となったものの、形式別の構成比は OTC 類発売以前の 4%台から 7.5%に伸びており、安定数に達したもようです。構成比の推移を見る限り、大手家電メーカーが販売を開始したことによる影響が大きく、Web 広告からの通信販売や家電量販店の在庫需要とみられます。一方、耳あな型オーダーメイド補聴器の前年比は 126.5%で OTC 類の構成比が落ち着くにつれ安定して伸びてきています。いずれにしてもマスクによる耳あな型の需要が伸び続けているのは明らかです。今後も専門家からの指導無しで通販などによって販売された OTC 類が、難聴者や補聴器の普及率に及ぼす良い側面と悪い側面について見守る必要があります。



TOSHIN Hearing NEWS 発行元

東神実業株式会社
トーシン・補聴器センター

本社：〒550-0005 大阪市西区西本町2-4-7
TEL ：06-6531-2541　FAX ：06-6531-3398
URL ：https://www.toshin-ha.co.jp/

be heard
Toshin